

高大連携を目指した国語教育の試み (1)

—梶井基次郎「檸檬」を教材として—

奥田 浩司* 久田 一成** 小久保 大樹**

* 国語教育講座

** 大学院教育学研究科国語教育専攻国語科内容学領域

Outcomes and Challenges of Japanese Education of the Connection between High School and University “Lemon” by Kajii Motojiro as Teaching Materials

Koji OKUDA*, Issei HISADA** and Hiroki KOKUBO**

*Department of Japanese Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. 研究の背景と目的

平成24年に文部科学省によって「大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策（諮問）」¹⁾が発表されて以来、現在まで「高大接続改革」をめぐり、高等学校の教育課程や大学入試制度、大学教育での方針が見直され、着実に「高大接続改革」²⁾を遂行するための検討・取組がなされている。

文部科学省は「高大接続改革」について以下のように説明している。

グローバル化の進展や人工知能技術をはじめとする技術革新などに伴い、社会構造も急速に、かつ大きく変革しており、予見の困難な時代の中で新たな価値を創造していく力を育てることが必要です。このためには、『学力の3要素』（1. 知識・技能, 2. 思考力・判断力・表現力, 3. 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）を育成・評価することが重要であり、義務教育段階から一貫した理念の下、「学力の3要素」を高校教育で確実に育成し、大学教育で更なる伸長を図るため、それをつなぐ大学入学者選抜においても、多面的・総合的に評価するという一体的な改革を進めていく必要があります。³⁾

すなわち、「高大接続改革」とは、高等学校教育での学びと大学教育での学びとを円滑に接続するために、高等学校教育、大学入試での評価のあり方、大学教育

の三つの側面を一体的に改革することであるといえる。

この改革に関わって、高等学校と大学の連携を企図した先行研究を確認する。高等学校と大学とが連携して行う授業（以下、高大連携の授業とする）の実践報告や先行研究は、管見による限り教科・科目を問わずいくつか見られる。上記の諮問が発表された平成24年以前からすでに高大連携の授業に関する実践が行われていたことが確認できる。

特に、高大連携の国語の授業実践に関する先行研究を取り上げると、大滝一登氏による「高等学校における国語表現指導の可能性と課題 —高大連携授業でのディベート指導を例として—」⁴⁾と、鈴木宏子氏による「古典和歌を詠もう —高大連携授業における実践とその分析—」⁵⁾がある。上記の他にも、富樫千紘氏⁶⁾や寺島徹氏と樋口敦士氏⁷⁾の先行研究がある。

大滝氏は国語表現分野を担当する大学教員である。授業実践の前半では、大滝氏が高校生17名を対象としたディベートの知識的、実践的理解を目指す講義を大学で行っている。後半では、生徒がディベートを行い、その後ディベートを録画したビデオを生徒自身が視聴することで振り返りを行っている。このような大滝氏の先駆的な授業実践は、高度に専門性を有した大学教員による高校生への授業実践が可能であるということを示してくれている。

次に、鈴木氏は古典文学を担当する大学教員である。授業実践の内容は、鈴木氏が実際に高校へ赴き、和歌における修辞法に関する授業を行うというものである。授業の後、鈴木氏は高校生に「恋もするかな」という決まり文句を第五句で用いて和歌を詠むという課

題に取り組ませている。このように専門性の高い大学教員が高等学校へ赴いて授業を行っている点は、高大連携の授業のあり方として参考にしたい点である。

これらの先行研究の成果に加えて、高等学校での学びと大学での学びとを円滑に接続し、高校生が大学での知見を得られるような高大連携の授業を行うことが有効であると考えられる。なぜなら、こうした授業は、高等学校での学びに大学で学ぶための導入となる側面を付加し、高等学校から大学までの学びに連続性をもたせることが可能になると考えられるためである。

ただし、高等学校の段階では、学習指導要領に示されている学習内容に準拠して指導することが求められる。そのため、高等学校の国語科教育において指導可能な内容を大きく逸脱した学習活動が現実的なものであるとは言い得ない。

こうした学習者の現状を踏まえ、テキスト論的な読解を導入することで、高等学校の学びをより豊かなものにできると考える。学習指導要領に沿った読解を、より発展させることが高大連携の授業の意義でもあるからである。

そこで、本研究では梶井基次郎「檸檬」を用いた研究授業を実施することで、高等学校での学びに大学の知見を加えた高大連携の授業のあり方を模索する。以下に具体的な研究の流れを示す。

まず、梶井基次郎「檸檬」を現在の文学研究の観点から分析し、学習指導案を作成する。その後、学習指導案にしたがって研究授業を実施し、授業を終えた段階で生徒を対象にアンケート調査を実施する。次に、生徒の授業中の発言やワークシートの解答、アンケート結果を整理、分析する。最後に、本研究で行った高大連携の授業の成果を総括する。

なお、本授業の立案、指導案の作成、アンケート調査の分析については、奥田、久田、小久保が共同で行った。実際の授業は、愛知教育大学附属高等学校の文系コースに所属する3年生82名を対象に、奥田が実施した。また、愛知教育大学附属高等学校教諭の横井健先生にはご協力いただき、ご助言を仰いだ。

本稿は、まず久田が作成し、奥田・小久保のコメントをもとに大幅に改稿を施したものである。

2. 文学研究をもとにした教材研究

■図用キャプション■

本章では、学習指導案を作成するのに先立って、文学研究の観点をもとに「檸檬」の教材研究を行う。

研究授業の前に、横井健先生が通常の現代文の授業で生徒に「檸檬」の指導を行った。その際、指導は7つの段階に分けて行った。始めの段階では、「檸檬」が6つの場面に分けられることを確認した。また、小説を読むための6つのポイントを確認し、生徒に学習の見通しをもたせた。具体的には、(1)「状況設定」を

確認する、(2)「場面構成」を確認する、(3)「中心人物の変化」を確認する、(4)「個性的な「描写」や優れた「表現」「イメージ・象徴性」を読み取る、(5)作品のテーマ(主題)に対する解釈、(6)作品に対して自分の「意見」「考え」を持つ、の6つである。

次の段階では、観点を意識して感想を書く活動に取り組んだ。その観点とは「檸檬」を読んで面白いと思った場面や、疑問を持った場面などである。学習活動を終えた後、生徒が挙げた「わからない・疑問を持った場面」を調査したところ⁸⁾、レモンや「丸善」といった記号に関するものから、文章中の表現や「私」の心情、物語内の空間の問題まで幅広く疑問点が挙げられていた。

3つ目の段階では、場面展開ごとに中心人物である「私」の行動や心情を把握することで、「檸檬」の構成を確認し、梗概を整理した。こうした段階を経て、4つ目の段階では「私」の設定とその効果について確認し、場面的変化に沿って「私」の心情の変化を整理した。

5つ目の段階では、「私」と対比的な人物の様子を二点挙げ、この人物の効果を読み取る活動を行った。また、レモンが日本に輸入されたものであることを確認し、レモンの爆破について考える活動も行った。そのうえで、6つ目の段階では「丸善」が何の象徴か、「檸檬」の主題は何かを考えた。最後の段階では、各生徒は考えた「檸檬」の主題についての発表を行った。こうした学習活動の中で、生徒はレモンと西洋の近代の問題との関わりに気づくことができていた。

このような生徒の疑問点や能力を踏まえ、文学研究の観点から「檸檬」の教材研究を試みた。分析する際に、作家である梶井自身が「丸善」に並べられた西洋の舶来品を好んで眺めていたという作家情報を重視した。作家情報をもとに、「私」の「丸善」への印象の変化について分析した先行研究には、神田由美子氏の「梶井基次郎「檸檬」の丸善」がある。

神田氏は「「檸檬」執筆当時の梶井のこの二律背反的な精神状態が、作品世界の二元論的構造を支えている」⁹⁾と述べており、作中における「私」の描写から梶井の「丸善」に対する心性を、次のように考察している。

丸善を媒介とする現在の〈私〉と以前の〈私〉のこの二元論的描写には、当時の梶井の丸善へのそして丸善が象徴する西洋の近代への強い愛憎が反映されていたと言ってよいだろう。¹⁰⁾

神田氏の梶井が抱いていたとする「西洋の近代への強い愛憎」は大変参考になる分析結果である。

そこで、本研究では神田氏の述べる「西洋の近代への愛憎」を、梶井の精神状態としてではなく、「檸檬」という作品全体における一つのテーマとして敷衍する分析へと発展させた。その際、生徒が疑問点に挙げて

いた丸善を含む京都という都市空間を分析の観点に加えた。その結果、「檸檬」には以下の二点に「西洋的近代への愛憎」を読みとることができると考察した。

一点は、「私」が日本文化を代表するような「蒲団」や「蚊帳」などを好む一方で、明治以降に西洋から日本に輸入されたレモンを握ることで幸福感を覚えるという、物質に対する「西洋的近代への愛憎」である。

このことは、「私」がこれまで好んで握っていたレモンを、「丸善」の洋書で築いた「城」に置いて爆発させる場面にも表れている。「私」が「丸善」の洋書を積み上げ、「奇怪な幻想的な城」の頂点に「檸檬を据えつけ」という行為が示すのは、「城」や「洋書」といった西洋的近代を象徴する物質を「私」が志向しているということである。ここに、「私」の西洋的近代への愛情が見られるのである。

しかし、その直後、西洋的近代の象徴であるレモンによって「奇怪な幻想的な城」を破壊しようとする「奇妙なたくらみ」に、「私」は動揺する。ここには、「私」が「奇怪な幻想的な城」を造ろうと想像する一方で、「私」の内面にあった西洋的近代への憎悪が、破壊への想像という形で不意に表れているのである。

このように、「丸善」で「私」が閃いた二つの想像から、物質に対する「西洋的近代への愛憎」が表現されているといえる。

もう一点は、都市空間に対する「西洋的近代への愛憎」である。現在の「私」が好む場所は「裏通り」であり、「出来ることなら京都から逃出して誰一人知らないような市へ行ってしまいたかった」と、京都という場所に「私」は拒否感を露わにしている。「私」が「裏通り」を好みつつも、京都を拒否している理由には、京都の街並みが関係していると推測される。「檸檬」が発表された当時の京都に関して、本田孔明氏は以下のように述べている。

大正四年当時の地図を見ると、三条通は縦に交差している堺町通から寺町通にかけてが、輸入雑貨などを扱う店の集中していた場所であったことがわかる。「丸善」とは、こうした表通りに面して、西欧の文物を取り扱う店の中でも代表的な存在であったといえる。¹¹⁾

このように、「丸善」は「表通り」に面しており、西洋文化を扱う代表的な店である。しかし、現在の「私」はそこを「重くするしい場所」として拒否しているのである。このことから、「私」が「裏通り」を好み、「表通り」にある「丸善」を拒むところに西洋的近代への憎悪が読み取れる。

一方で、生活が蝕まれる以前の「私」は「丸善」を好んでいた。この頃の「私」は、「丸善」の商品を「見るのに小一時間も費やすことがあった」のである。つ

まり、以前の「私」は西洋文化に触れる場として「丸善」を捉え、好んでいたのである。そのため、以前の「私」には西洋的近代への愛情があったといえる。

このように、現在の「私」と過去の「私」との比較から、京都という都市空間に対する「西洋的近代への愛憎」が見られる。

したがって、「檸檬」を梶井基次郎の作家情報や当時の京都に関する同時代の資料をもとに分析することで、「私」は「西洋的近代への愛憎」を抱いているといえる。さらに、「西洋的近代への愛憎」は、「私」が好む物質や、「私」と京都という都市空間との関わりの中に読みとることができると考察する。

3. 研究授業の実施

(1) 学習指導案とその実施

本章では、前章で述べた教材研究をもとにした学習指導案を示し、実施した研究授業の様子について説明する。次頁に、50分間に行う主な学習活動や発問、指導上の留意点などを示した学習指導案(資料1)を掲載する。

まず導入では、文学研究の変遷について説明した。作品の中に作者の意図と真実を解説しようとする古典的な文学批評から、ロラン・バルトが提唱したテキスト論への変遷について言及した。そうすることで、作者の意図を離れ、自由に解説することが可能だと考えた。そこで、生徒が文学研究を体験できるよう、「檸檬」と比較分析する作品として、高村光太郎の「レモン哀歌」を扱った。この詩は「檸檬」と同時期に発表され、「檸檬」と同様にレモンが重要な位置を占める詩である。これら二つの作品を比較検討することを通じて、簡単に文学研究を体験するという導入を考案した。

「レモン哀歌」は恋愛をテーマとした詩であり、高村光太郎の妻が臨終を迎える病床でレモンを囁んだことで、一瞬意識が正常となったという内容である。恋愛という概念は西洋を起源とするものと言われている¹²⁾。その意味で、この詩ではレモンと恋愛とが関連づけられており、そこに近代性を読みとることができるのである。

一方で、「檸檬」には作品それ自体に恋愛が関係しておらず、漢字で「檸檬」と表記されていることから、この小説には西洋的近代との切断が示唆されていると考えることができる。

このような導入を踏まえ、主発問として「私」が「丸善」をレモンで爆破しようとしたことは、本作品の中でどのような意味をもつのかを考えさせることとした。

そのため、主発問を考える際に必要となる情報を記載した資料(資料2)を配布した。また、生徒が主発問や次に提示する発問に解答したり、他の生徒の意見や指導者の解説を聞いてメモしたりする欄を設けたワーク

資料 1 研究授業の学習指導案

本時の学習指導 展開 (50分)

時間配分	主な学習活動	指導上の留意点
10分	1 本時のねらいと研究の目的を聞く。 テキスト理論について講義を聞く。	○ 高大連携を意図した授業であり、これまでの物語の読み方から発展した文学研究の読みについて考える旨を説明する。また、テキストの性質と、それに対する読者の存在についての説明を加える。
2分	2 本時の学習に必要な資料を配布する。	○ 備考に記した資料を配布し、適宜目を通すように言葉がけをする。
8分	3 「レモン哀歌」と「檸檬」を間テクスト的に読む。	○ 両作品において、檸檬がどのように扱われているのか、また、なぜ檸檬でなければならないのかを考えさせる。 ○ 本教材の他者の不在や、抽象的な物語内容ということを説明する。
補助発問 「檸檬」と「レモン哀歌」を読み比べて、両作品での檸檬がもつ意味の違いについて考えよう。		
5分	4 「檸檬」における檸檬の爆発の意味について考え、話し合う。	○ これまでに学習した解釈を発展させ、資料を活用しながら、檸檬の爆発とはどのように意味づけられるのかを考えさせる。
主発問 「檸檬」において、語り手が檸檬で丸善を爆破しようとしたことは、本作品の中でどのような意味をもつのか考えてみよう。		
10分	5 個人で考えたことを口頭で発表する。	○ 生徒の意見を口頭で発表させ、全体で挙げた意見の要素を説明する。
5分	6 結びの京極の町へと下がっていくことから、「檸檬」の空間について個人で考え、話し合う。	○ 4で考えたことをもとに、京都の都市空間と檸檬の爆発との関係について考えさせる。
発問 最後の一行で語り手が京極へと下っていく場面があります。さきほど考えた檸檬の爆発の意味が、本作品の舞台となる京都とどうかかわっているのかを考えてみましょう。		
5分	7 個人で考えたことをまとめ、口頭で発表する。	○ 自らの意見を口頭で発表させ、全体で挙げた意見の要素を説明する。
5分	8 高校までの物語の読み方と文学研究の読み方の違いについての説明を聞く。	○ これまでの学習で出た様々な意見が文学研究における多様な読みへの第一歩となることを説明する。

備考

・梶井基次郎の作家情報と檸檬の来歴の要旨が記されたプリントとワークシート、高村光太郎の「レモン哀歌」のテキストを人数分準備する。

シートも必要であるため、資料3のように作成して配布した。

次に、主発問で考えたレモンの爆発と、「檸檬」の舞台である京都との関わりを考える発問を設定した。主発問の解答をもとに、生徒が再び「檸檬」の物語全体を俯瞰して思考することを促す目的の問いである。

しかし、実際の授業では生徒が主発問を考えられるように、物語内容のどこに焦点を当てれば良いかを説明する必要があり、生徒が主発問を考えるまでに想定よりも大幅に時間がかかった。そのため、指導者は発問を考えるための手がかりとなる知識や着眼点を説明し、各生徒はワークシートに自らの意見をまとめた

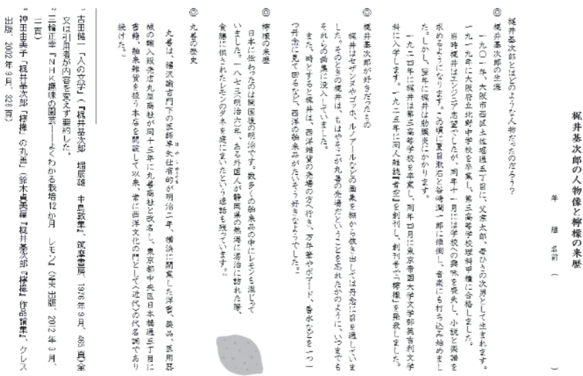
けであり、その意見を発表するには至らなかった。

最後のまとめでは、高等学校までの物語の読み方と、大学で学ぶ作品の読み方を改めて明確に説明することとした。その後、生徒は本研究で行った研究授業を通して、これまでの国語教育と大学での学習との比較や、高大連携の授業に関して抱いた感想を書くこととした。

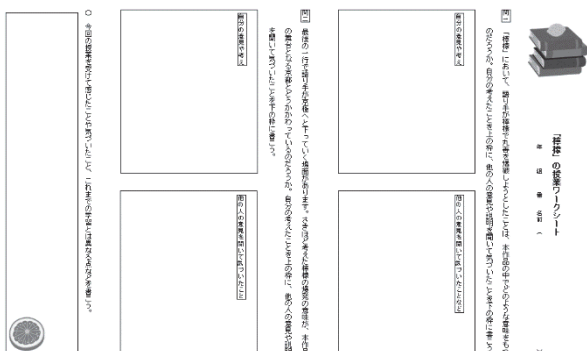
しかし、実際の授業では時間の都合上、生徒が授業中に感想を書くことができなかった。そのため、授業後ワークシートに感想を書いて提出するように、生徒に指示していただくことを横井健先生へ依頼した。その後、横井健先生を通じてワークシートの回収を行った。

以下に研究授業で使用した資料(資料2)とワークシート(資料3)を掲載する。配布資料の内容に関しては、「梶井基次郎の生涯」、「梶井基次郎が好きだったもの」、「檸檬の来歴」、「丸善の歴史」の四点の要約である。

資料2 実際に配布した資料



資料3 授業で使用したワークシート



(2) 授業中の生徒の発言

前節でも述べたが、主発問に至るまでに、生徒に「檸檬」が発表された当時の日本におけるレモンのイメージを説明した。その際、生徒が説明内容や本文の内容を

理解できているかを確認するために補助発問を加えた。具体的には「レモン哀歌」と「檸檬」それぞれにおけるレモンに関わるイメージの違いや、「檸檬」における西洋的近代を象徴するもの、日本文化を象徴するものを確認した。そうした発問や主発問に対する生徒の発言を本節で確認し、実際の授業での実態を明示する。

ただし、主発問以降の問いに関しては、時間の都合上生徒の意見を発表させることがなかったため、割愛する。当初予定していた二つ目の発問に対する生徒の解答は次章で参照することとする。

まず、「レモン哀歌」におけるレモンはどのようなイメージか尋ねた。この発問は、なぜ「レモン哀歌」ではレモンが用いられているのか、という意図でなされたものであった。

この発問に対する生徒の解答は、「レモンだったらみかんの方が良い」と「最期の奥さん用」であった。ここで生徒の「みかんの方が良い」という自由な発想による解答も見られたが、生徒はレモンが奥さんの臨終のために用いられたと気づいた。それによって「レモン哀歌」におけるレモンは当時西洋から日本に輸入された純愛、恋愛のイメージの象徴という解説を加えるに至った。

この発問を踏まえ、次に「檸檬」におけるレモンのイメージを問うた。この発問によって、生徒が日本文化を好む「私」に注目して主発問へと移行することを期待した。そのために説明を加えつつ、学習内容の理解度を確認するために適宜細やかな発問を行った。

「檸檬」におけるレモンのイメージに対する生徒の解答は、「いい色」や「重さがいい」、「冷たさ」といった文章に書かれているレモンの特徴であった。このようにレモンの特徴を見る視点から新たな視点へと移行させるために、「私」が心惹かれているものに注目させると、生徒は「みすばらしいもの」と答えた。

その次に、作中に登場する都市の名前に注目させると、「書いていない」と答える生徒もいたが、「仙台とか長崎」と適切に内容を把握できている解答が見られた。さらに、その都市にあるものは何かと問うと、「がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂いのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣」と答えた。そうした物から何を連想するかと問いかけると、生徒は「日本」と答えることができたため、「檸檬」には日本文化に関わる物質が登場していることまで理解できていることが明らかとなった。

ここまで「レモン哀歌」と「檸檬」それぞれにおけるレモンのイメージを確認し、次に両作品におけるレモンの違いについて気づいた点を発表させた。すると生徒は「片仮名と漢字」と答えた。続けて生徒に片仮名と漢字の違いについて尋ねると、「片仮名を西洋、漢字を日本」と答えた。この点については、「檸檬」では日本風の漢字表記を当てはめており、西洋のもの

を東洋の文脈の中に置き換えていると説明した。

このように西洋のものを好きであった「私」が、現在は和風のもの好むようになっていく内容を生徒が概ね理解できていることを確認したうえで、主発問へと移行した。

主発問に対する生徒の解答は次の三つであった。

- ・自分が以前好きだった西洋のものを積み重ねて、その上に檸檬を置いて爆破させる想像をすることで、過去に好きだった西洋文化を自分の中から完全に消し去ってしまおうという考え。
- ・檸檬は、自分の心を考えているから、西洋を想像することで自分にまとわりつく不吉な塊を消し去った。
- ・檸檬を手に入れたことで、憂鬱な気がしてかろやかな興奮がかえってきたことにより、(爆破することで)無限の可能性を手に入れた。

二つ目の意見は国語教育で小説を扱う際に、登場人物の心情を読み取らせる指導方法の結果を反映したものだといえる。この二つ目の意見に、「檸檬」が書かれた当時の時代背景をもとにして分析するという新たな視点を加えたものが、一つ目の意見だといえる。「私」の心情把握の観点では、三つ目の意見も二つ目の意見と同様だが、この意見を支えるだけの根拠が作品や当時の時代背景、作家情報にはない。そのため三つ目の意見を発表した生徒に意見の根拠を答えさせようとしたが、時間の都合上、割愛した。

4. 研究授業の実施結果

(1) ワークシートにおける主な生徒の解答

本節では、前節では取り上げられなかった他の生徒の意見を、ワークシートに記載されているものをもとに確認していく。ただし、ワークシートの最後の感想などの自由記述欄に書かれていた内容については、次節で述べるアンケート調査の結果と同様のものであったため、割愛した。

問一における解答を確認する。ワークシートにおける発問は、「檸檬」において、語り手が檸檬で丸善を爆破しようとしたことは、本作品の中でどのような意味をもつのであろうか。自分の考えたことを上の枠に、他の人の意見や説明を聞いて気づいたことを下の枠に書こう。」である。ここで「語り手が」となっているのは「語り手である「私」が」と修正すべきであった。

この設問において最も多かった解答は、「私」の中にある西洋を好んでいた過去の自分を、レモンの爆破によって消し去ろうとしたというものである。この西洋と日本文化との対立が「私」の心情や内面に関わっているという分析は、主発問に至る説明を根拠にしたものといえるであろう。

次に多かった解答は「檸檬」の作品自体に関する内容である。こちらも西洋と東洋・日本文化との対立を

読み取り、「檸檬」には西洋に対する批判意識があるというものであった。この解答は作品を通じて表現されていることを読みとったものであるため、文学研究に近いアプローチによるものであるといえる。

その他に関しては、西洋を東洋や日本文化によって上塗りするという解答だが、これは指導中のレモンを漢字で表記することで西洋を和風なものに変えていくという説明をそのまま用いたものだと考えられる。

問二における解答を確認する。ワークシートにおける発問は、「最後の一行で語り手が京極へと下っていく場面があります。さきほど考えた檸檬の爆発の意味が、本作品の舞台となる京都とどうかかわっているであろうか。自分の考えたことを上の枠に、他の人の意見や説明を聞いて気づいたことを下の枠に書こう。」である。

この設問の解答は問一の解答をもとに考えるものであったため、ほとんどの解答が西洋と東洋との二項対立の視点を取り入れたものとなっていた。問一の傾向と異なる点は、問二は「私」の心情把握を中心とした分析がほとんどを占めるようになっていたことである。

主な解答の内容は、次の三つに分けられる。

一つ目の解答は、レモンを爆破したことで、心の抛り所となるものがなくなったために、「私」は不安定になった。また京都の街から西洋的近代の記号が実際に消えるわけではないため、その場から逃げたい、あるいは現状を変えられないという「私」の諦観が表れていると分析したものである。

二つ目の解答は一つ目と同様に、現状を変えられないという意見が主であったが、「私」の気持ちが「下がった」、あるいは特に心情に変化はないというもので、西洋と日本文化との対立を深く考える意見ではなかった。

最後に三つ目の解答は、レモンを爆破させたことで西洋のものを排除し、「私」は京都の街でも自信をもって生きていくことができるようになったというものであった。

この問二については、指導者の説明によらない生徒の意見が反映されていると言い得るのではないだろうか。

(2) 研究授業実施後のアンケート調査

高大連携の研究授業を行った後、受講した生徒に対してアンケート調査を行った。受講した生徒のうち、アンケートに回答した生徒は75名であった。調査内容とその結果については以下の通りである(資料4)。

この他、「感想・さらなる疑問など」を自由記述で回答させた。その結果、「一つの作品のいろいろな読み方があって面白いと思った。」や「他の作品と読み比べることはやったことがなかったので、よい勉強になりました。」、「檸檬」で疑問に思っていた部分について新たな考え方をすることで、自分の中でいろいろと納得することができました。」と好印象であった。

資料4 研究授業のアンケート結果

	講義内容(難易度)について	人数	%
1	1 難しい	26	34.7
	2 丁度良い	48	64.0
	3 易しい	1	1.3
2	「檸檬」の理解について		
	1 「理解」が深まった	62	82.7
	2 理解は深まらなかった	3	4.0
3	3 どちらともいえない	10	13.3
	「檸檬」でさらに学びたかったこと・知りたかったことについて		
	1 学ぶこと・知ることができた	44	58.7
4	2 学ぶこと・知ることができなかった	6	8.0
	3 どちらともいえない	25	33.3
	「文学作品」の理解について		
	1 読み方が変わった・深まった	50	66.7
	2 読み方は変わらない・深まらない	12	16.0
	3 どちらともいえない	13	17.3

一方で、「結局、梶井が何を言いたかったのかよく分からなかった。」や「西洋から日本へという構造があるように思いましたが、このことから作者は何を訴えたかったのか。」など、作者の意図から自由になるという授業での説明を十分に理解できていないと思われる記述も見られた。ただし、こうした生徒の感想は、授業内容に対して「難しい」と答えた生徒が3割を占めた実態を反映したものだといえる。

この高大連携の授業の難易度に関しては次章で詳しく述べるが、研究授業を通して、大学で学ぶ多様な読み方を理解させることが達成できたといえる。そのため、当初の目的であった大学の知見を高校生と共有することができたと考えられる。ただし、ワークシートの生徒の解答を見る限り、授業内容についての理解度に「丁度いい」と答えた6割の生徒の実態も注意深く検討する必要があるであろう。

5. 高大連携の授業を実施する際の留意点と改善策

前章でも述べた通り、研究授業を受けた生徒の3割半は学習内容に関して「難しい」と答えた。その一方で、「丁度いい」と答えた生徒が多数を占めた。この結果をもたらした理由として、主発問に対する生徒の考えを促すための支援が十分に行われたためだと考えられる。具体的には、当時の時代背景や文化について指導者が説明を加えたり、レモンを「檸檬」と漢字で表記することに注目させたりするなどの指導がなされたためだと考えられる。このように、「講義内容の難易度」を「丁度いい」と回答した背景には、生徒が指

導者の解説を理解しやすいと評価したことが推測されるのである。そのため、生徒が大学で学ぶ内容の難易度を評価して「丁度いい」と回答した否かに関しては明らかではないのである。こうしたことを踏まえると、高大連携の授業を実施する際には、その授業で扱う学習内容の難易度が問題になるといえる。

大学と高等学校の授業を接続するため、学習内容それぞれが難化することが考えられる。しかし、そうした高度な学習内容を、水準を落として学習活動に取り入れて指導することは、高大連携を図る授業の連続性をもたせるという点ではふさわしくない。一方で、学習者が理解不可能な内容を扱うことは学習者にとって効果的な授業とは言い得ない。

こうした高大連携の授業における学習活動の難易度の問題を踏まえて、今後は学習内容や学習活動を決定していくことが求められる。その際、高大連携の授業を行う準備段階で大学教員と現場の教員が連絡を取り、学習者である生徒の能力や学習の履歴などを大学教員が把握する必要がある。加えて、現場の教員も大学教員が想定している学習活動を把握し、事前に授業内容の検討をする必要があるといえる。

6. 本研究の総括

本研究では、文部科学省の「高大接続改革」を推進するにあたって、高等学校での学びから大学までの学びに連続性をもたせることを目的とした高大連携の授業を実施した。具体的には、梶井基次郎「檸檬」を用いて、高校生に大学で学ぶ作品の分析方法に基づいて物語を読むことを指導することによって、高等学校までの学びに大学で学ぶ内容を導入的に取り入れた。

実施した研究授業では、レモンの爆破が本作品の中でどのような意味をもつのかを考える発問を行った。一部の生徒は、ワークシートに本作品には西洋に対する批判意識があると解答していた。つまり、「私」という登場人物の心情把握を離れて、作品を通して読みとれることについて考察し、解答を導き出すことができていたのである。ただし、授業で扱った内容が難しく、必ずしも全ての生徒が従来の国語教育での読み方とは異なる読み方を示したわけではない。

しかし、大学で学ぶ文学作品の分析を高校生に体験させ、より自由な読みへと多くの生徒を導くことができたといえる。そのため、当初の目的であった高等学校までの学びに、大学の学びの導入することは可能であると言い得るのではないだろうか。

また、当初の想定からは外れるが、次のような成果も得られた。研究授業の導入では、「レモン哀歌」と「檸檬」に用いられるレモンのイメージの違いについて比較分析を行った。生徒は両作品の相違点に注目することで、心情把握だけではない作品分析の視点を獲得で

きる可能性を示したのである。

以上のように、本研究では、大学で学ぶ作品の分析方法を導入することを通して、国語教育での読解に新たな知見を接続することの有効性を確認できたと考える。

注

- 1) 文部科学省「大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について（諮問）」（2012年8月28日）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325060.htm（2019年9月23日 閲覧）
- 2) 文部科学省が平成27年に発表した「高大接続改革」の具体的な実行プランは以下を参照のこと。文部科学省「高大接続改革実行プランについて」（2015年1月16日）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/sonota/1354545.htm（2019年9月23日 閲覧）
- 3) 文部科学省の「高大接続改革」に係る質問と回答（FAQ）の「1-1-1「高大接続改革」とはどのような改革ですか。」を参照した。http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1402115.htm（2019年9月23日 閲覧）
- 4) 大滝一登「高等学校における国語表現指導の可能性と課題 —高大連携授業でのディベート指導を例として—」（『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』第35巻第1号，2011年3月）
- 5) 鈴木宏子「古典和歌を詠もう —高大連携授業における実践とその分析—」（『千葉大学教育学部研究紀要』第67巻，2019年3月）
- 6) 富樫千紘「アクティブ・ラーニングと高大連携を生かした国語表現の実践 —地域連携授業の展望と課題—」（『稚内北星学園大学紀要』第17号，2017年3月）。富樫氏の授業実践では、高校生が大学生へ母校の魅力を伝えるという活動に取り組んでおり、高校生が大学へと働きかけるという高大連携の授業のあり方を提示している。
- 7) 寺島徹，樋口敦士「日本語表現の力を高めるための小論文指導 —高大連携を視野に入れた国語科におけるブレインストーミングの試み—」（『Journal of the School of Liberal Arts』第4巻，2012年）。この実践報告は、大学教員である寺島氏考案の授業方法を、高等学校教諭である樋口氏が実践した成果である。
- 8) 調査にあたって、横井健先生（前掲）に御協力頂いた。
- 9) 神田由美子「梶井基次郎『檸檬』の丸善」（鈴木貞美編『梶井基次郎『檸檬』作品論集』，クレス出版，2002年9月，327頁）

- 10) 神田氏前掲，同頁
- 11) 本田孔明「幻の街——梶井基次郎『檸檬』論——」（『季刊文学』第5巻第4号，1994年，107頁）
- 12) 山根宏「『恋愛』をめぐる一明治20年代のセクシュアリティ—」（『立命館言語文化研究』第19巻4号，立命館大学国際言語文化研究所，2008年3月）を参照した。

（2020年9月16日受理）